



# 学校だより

平成29年11月30日  
横浜市立茅ヶ崎東小学校  
校長 山下 浩  
都筑区茅ヶ崎東2-11-1  
943-0802・0803

## 自分の得意なコミュニケーションツール ～優位感覚～

学校長 山下 浩

遊歩道沿いの紅葉も散り、落ち葉のじゅうたんの上を歩く音に冬の訪れを感じます。

11月22日、PTAはぐくみ委員会主催の家庭教育学級の講演を拝聴する機会がありました。講演内容は「子育てコーチングコミュニケーション」～優位感覚～。講師は、橋口 直子先生。先生は、「国際コーチ連盟認定プロフェッショナルコーチ」の資格をお持ちです。大変僭越で恐縮ですが、学校だよりの巻頭に、PTA行事を紹介させていただきます。その理由として、今回の講演が私にとって、合点の行く、目からうろこの内容だったことが挙げられます。更に、私達教師が日頃行っている児童への指導の有用性の裏付けにもつながる内容でしたので、PTA通信と重なる部分がございますが、あえてとりあげさせていただきます。

講演のくわしい内容は、PTA通信に譲るとして、私なりにつかんだ概要は次のようなものでした。

「自他を含め、**人の感覚の得意な分野(優位感覚)**を見極め、それを**活用することでコミュニケーションが円滑**にできる。

ご存知のように、人の感覚には、「耳からはいる音」(聴覚)や「目から入る映像」(視覚)、「肌で感じる」(触覚、体感)「文章で考える」(言語感覚)などがあります。どの感覚を優位に使って物事を認識しているかは、人それぞれだそうです。一つあるいは複数の感覚を優位に使っている人もいます。そこで、その人の優位感覚を分かった上で、接することができれば良好なコミュニケーションに活用できるということになります。私が、優位感覚が指導の有用性の裏付けにつながると冒頭に述べたのは、教師が、子どもに問題を把握させる導入の部分(授業の始まり)の指導と優位感覚とがマッチする部分が多かったからです。具体的には、集団の子どもたちに早く問題を把握させるために、教師は、問題を板書したり、声に出させたり、ノートに視写させたりします。子どもたちにさせているそれらの活動が、様々な優位感覚にほぼ対応できるものになっているからです。以下に対応の仕方を示します。

- 問題を教師が**板書**する→子どもは、**視覚**でとらえられる。文章(**言語感覚**)を目でとらえられる。
- 問題を**音読**する→子どもは、**聴覚**でとらえられる。文章(**言語感覚**)を耳でとらえられる。
- 問題をノートに**書く**→子どもは、鉛筆でノートに書く＝指を動かして(**体感覚**)とらえられる。文章(**言語感覚**)を体でとらえられる。

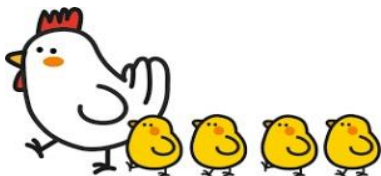
更に、学習活動や宿題に取り入れている、漢字の視写や教科書の音読は、次のように対応しています。

- 漢字を練習帳に書く→子どもは、鉛筆でノートに書く＝指を動かして(**体感覚**)とらえられる。文章(**言語感覚**)を体でとらえられる。
- 教科書を音読する→子どもは、**聴覚**でとらえられる。文章(**言語感覚**)を耳でとらえられる。

ただし、気をつけなければならないのは、体感覚を苦手としている子に、無理やり長時間にわたって視写をやらせたり、聴感覚を苦手としている子に、無理やり長時間にわたって音読をやらせたりすることは、返って子どもを苦しめることになり逆効果になるということです。講演会終了後、間もなく行われた職員研修の際に、真っ先に教職員に情報提供いたしました。

今年も、残すところカレンダー1枚となりました。巷では、クリスマスソングが聴こえてきて、うきうきした気分になります。一方では、師走といわれ何かと気忙しくなってきますが、地に足をつけて落ち着いた教育活動に努めてまいります。

引き続き、ご支援・ご協力のほどお願い申し上げます。どうぞよいお年をお迎えください。



行く年2017

来る年2018

